

*本コーナーでは、9～12月の年内に試験が実施され、合否が決まること多い総合型選抜(旧AO入試)と学校推薦型選抜を、「年内入試」と総称しています。年内入試支援をテーマとしたVIEWnext高校版 2023年8月号・特集はこちら▶▶



生徒の可能性を引き出す 新進路選択支援

年内入試(*)の募集枠の拡大など、大学入試環境が大きく変化している中で、生徒がより自分に合った進路を選択できるよう、生徒の内面や可能性を引き出すことが一層重要になってきている。そうした支援においては、学校や教師には何が求められるのか、実践事例を通じて考える。

何度も自己理解の場を設け、 自分の目標を見いだせるよう支援

静岡県・私立静岡聖光学院中学校・高校

同校が目指した生徒の行動変容、そのための教師の支援

生徒

BEFORE



自分の関心や特性を将来像に結びつけられず、学習に意欲的になれない生徒がいた。

教師の支援

- 高校1年次の個人研究の支援を通じて、生徒が自己理解を深め、目標を見いだせるようにした。
- 2年次の夏までにやりたいことを明確にし、問いを持ってオープンキャンパスに参加できるようにした。

生徒

AFTER



「したいこと」を見つけ、学びたい内容と合う大学・学部を見極めるようになった。

高1の個人研究を軸に、 6年間の探究学習を再構築

訓教目標の1つに「探究心に基づく緻密さ」を掲げる静岡県・私立静岡聖光学院中学校・高校は、十数年にわたって、高校1年次に個人で取り組む探究学習(以下、個人研究)を続けてきた。ほかにも、生徒寮の食品ロス削減やサメの研究など、生徒の発案による課外活動も活発だ。しかし、そうした活動を通じて将来の目標を明確にし、その達成に向けて意欲的に学ぶ生徒が一部であったことを課題視していた。

そこで2023年度に探究学習を改変。中学校3年間は探究学習の基礎を学びながら自分の関心と向き合い、高校1年次は個人研究を通じて自己理解を深め、高校2年次からは見いだした希望進路の実現に結びつけるといった形で各時期の共通の目標を立て、活動を体系化した(図)。田中潤教頭はカリキュラム再構築の意図をこう語る。

「内発的な動機づけがあつてこそ探究は深まり、目標を持つことにつながります。それに伴い、学習意欲が高まっていきます。そうしたプロセスは、生徒全員に必要なことです。ただ、自分の関心を単語でしか表現できない生徒もいます。そこで、教師が丁寧に対話

をし、「マイ・ストーリー」(*)の明確化を支援する体制としました」

23年度は新カリキュラムでの初めての個人研究となるため、最初に自己理解の活動を丁寧に行い、その重要性を生徒に伝えた。高校1学年主任の中村光揮先生は、次のように説明する。

「『すべきこと』『できること』『したいこと』を書かせたところ、『すべきこと』以外の2項目はほぼ空白でした。そこで、『すべきこと』を認識している点を褒めた上で、中学校3年間で達成したことがあるはずであり、それをポジティブに捉えて、今後『したいこと』を増やそうと呼びかけました」

その後、担任が面談の度に生徒に3項目を尋ねるようにしたところ、「『したいこと』を言える生徒が、徐々にではあるが増えてきた。

「昨年度受け持った高校3年生のうち、希望進路を実現した生徒の多くが、内発的な動機を持っていました。『できること』や『したいこと』を引き出し、生徒が主体的に動き出せるよう、粘り強く対話をしています」(中村先生)

自己理解も学部・学科研究も 繰り返すことで深まる

高校2年次の4月には、「進路達成

*1『VIEW next』高校版 2021年8月号の特集において、生徒一人ひとりの「自分のこれまでの学びや活動と、その成果や結果に至るまでのプロセス、これからの展望」を「マイ・ストーリー」と呼ぶこととし、同特集では、「マイ・ストーリー」を描き、それを語る力が、これからの大学入試で希望進路を実現するために必要とされることを検証しつつ、そうした力を生徒に育む教師の指導や支援のあり方・方法を、実践事例を通じて示した。

図 探究学習と進路選択 中高6年間の流れ

学年	中1	中2	中3	高1	高2	高3
テーマ	学び方を学ぶ		使命感と領域性の模索		学びとキャリアの融合と探究	
段階	自己理解 他者理解 → 社会理解			ライフストーリーからライフデザインへ		
目標	自分をつくる 居場所をつくる	日々の生活から キャリアをデザインする	「私の来た道」から他者とともに生きること			
活動内容	ラーニング・ ストラテジー	ゼミナール	個人研究 (志望動機の明確化)			探究表現 (入試に活用)
	メタ認知能力を鍛えるとともに、問いの立て方や他者との活動の進め方、発表の方法など、探究学習に必要な学び方を学ぶ	農学、プログラミング(工学)、数学、国際交流、経営のゼミナールを設置。生徒はいずれかに所属。中学3年生がリードして、中学2年生と合同で探究学習に取り組む	個人研究を実施。教師1人あたり生徒3人を担当。 5月 合宿で自己理解を深める 5～7月 研究テーマと活動計画を検討 7月 研究テーマと活動計画を発表 8～9月 フィールドワーク、調査、実験等 10～1月 論文執筆、発表準備 2月 発表会	4月 教科テストと進路適性診断を同日に実施。マッチングで示された大学に資料請求し、大学・学部研究を行う 5月 個人研究の振り返り(オープンキャンパスに向けた問いづくり)	夏季休業中などにオープンキャンパスに参加し、自分の問いを基に学部・学科の内容や研究室などを調べる。志望校が明確になってきたら、一般選抜か年内入試か、受験方式を検討	個人研究を振り返り、「マイ・ストーリー」として語るできるように整理し、志望理由書の作成や面接練習などに取り組む

※学校資料と取材を基に編集部で作成。

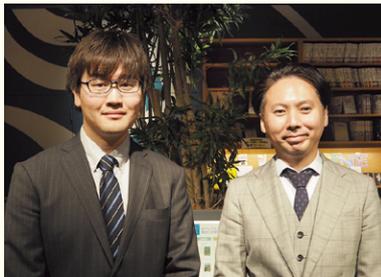
お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

担任



左から/中村光輝(高校1学年主任、英語科主任)、田中潤(教頭)

学校概要

- ◎設立 1968(昭和43)年
- ◎形態 全日制/普通科/男子校
- ◎生徒数 1学年約90人
- ◎2022年度卒業生進路実績 国公立大は、東北大、秋田大、筑波大、東京工業大、富山大、信州大、静岡大、静岡県立大などに12人が合格。私立大は、青山学院大、上智大、中央大、東京理科大、明治大、立教大、早稲田大などに延べ138人が合格。省庁大学校は、防衛大に1人が合格。

プログラム(*2)を用いて教科テストと進路適性診断を同日に実施した。即日に返却された進路適性診断結果には、自分の志向に合った大学・学部が表示されたが、生徒からは「自分は知らなかったが、確かに自分の興味と合いそうな大学ばかりだった。早速調べてみたい」といった声が上がった。「生徒や教師が調べられる大学の数には限りがありますし、選択にはその人の主観が入ります。客観的に本人の本質を見極めて、合う大学・学部を示してくれるのが、ICTによるマッチングのよさです」(田中教頭)

「オープンキャンパスは、大学案内では分からないことを確認してこそ参加する意義があります。個人研究の振り返りを通じて、大学教員に質問できるようにしました。すると研究室のテーマを調べておき、自分がしたい研究ができるのかをオープンキャンパスで確かめる生徒もいました」(中村先生)

探究学習も大学・学部研究も、何度も行うことで自己理解が深まり、志望が明確になっていく。その中で自分のそれまでの学びを生かすことができる受験方式を生徒に見極めさせて、高校3年次の入試支援につなげている。

「たとえ個人研究が入試と直接結びつく内容ではなくても、自分の人生の一部として語れるようなものになるよう、支援していきます」(田中教頭)

*2 「自分の軸を持った進路選択」の達成を支援するためのベネッセの進路学習教材。生徒それぞれが大切にしている意識や行動に関する診断結果を基に、大学などの情報を提供する無料プログラム。「進路達成プログラム」の詳細は、ベネッセハイスクールオンラインで紹介しています。ログインにはIDとPWが必要です。下記URL、または右の2次元コードからアクセスしてください。
https://bhsos.benesse.ne.jp/hs_online/info/shinro-pgm/kyozai.html?utm_campaign=2023_view

